

海外レポート

韓国社会における英語の意味 —— 韓国・釜山での調査から ——

田保 顕

2012年9月1日から2013年8月31日までの1年間、日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」の一環で大阪市立大学都市文化研究センターより韓国・釜山大学校韓国民族文化研究所へ派遣された。本派遣事業の目的は「グローバル言語」としての英語が韓国第2の都市である釜山でどのように教育され、学ばれ、またそれが人々の生活にどのような影響を与えているのかを考察することであった。

韓国では第7次教育課程実施により1997年から小学校での英語教育が必修化された。一方、小中学生が英語圏諸国に留学する早期留学も広く行なわれ、塾通いも盛んである。韓国ではそうした私教育費の家計に占める割合の高さが社会問題として認識されている。

こうした状況に対する釜山広域市（以下、釜山市）の対策の1つが釜山グローバル・ビレッジの開院であった。

1. 釜山グローバル・ビレッジ

釜山グローバル・ビレッジ（以下、BGV）は2009年7月、釜山広域市教育庁（以下、教育庁）が都心部であるソミョンの旧・ケソン中学校跡地を提供し、市が320億ウォン（約32億円）を投じて建設した公共外国語教育機関である（カン 2011：131）。

BGVは「全国初の通学型英語学習空間」であり、「まるで英語圏の国に来たような実際同様の環境と様々な体験教育を通じて」学習者たちに「英語を使うことに対する自信を持たせ」ることを目的としている（BGVパンフレットより）。

BGVを訪れたのは平日の午前中であったが、多くの生徒たちが授業を受けていた。「小学6年生の授業です」と男性職員が教えてくれた。1クラスあたり15人前後で構成され、1授業時間が40分、休憩は10分だという。

生徒たちが使うのは主に「体験施設棟」と呼ばれるヨーロッパの寄宿学校を思わせる建物で、そこには約50種類のテーマ別教室がある。建物に入るとまずはイミグレーション・オフィスを模した施設がある。その奥には「Air Busan」と書かれた、空港のチェックイン・カウンターを模した施設がある。「エアブサンがスポンサーなので

釜山銀行やロッテも大きなスポンサーです」とまた男性職員が教えてくれた。

次の階には銀行やホテルなどを模した教室が並んでいる。その他にも郵便局、警察署、病院、薬局、またクッキング体験ルームや放送局まであり、英語で説明を受け、実際にやってみることで英語を体験的に身につけることができるようになっている。

週末や夏期・冬季休暇に行なわれる「放学キャンプ」とは異なり、平日の定期授業は釜山市内にある小学校の授業の一環なので受講料はかからない。各学校が学期に1度生徒たちを送り、火・水、木・金のいずれか2日間で約17時間の体験学習が行なわれる。しかしこれは小学生だけであり、幼稚園児や中学・高校生などは受講料を払うことによって別のコースを受講することになる。

男性職員は韓国内にある他の英語村との違いについて、BGVは市と教育庁が関わる公教育施設であり、学校と連携していることを強調した。これは家庭の所得水準に関係なく子どもたち全員に英語体験の機会を与えようという市および教育庁の姿勢の表れであると思われる。しかし一方で、親たちは子どもたちに少しでも多くより良い教育を受けさせたい、との思いから私教育への出費を惜しまないのである。

2. ハグォン（学習塾）

韓国には「ハグォン」と呼ばれる学習塾が多く存在する。派遣期間中、市内にある小さな学習塾を訪問する機会を得た。中に入ると塾長が出迎えてくれた。42歳の女性である。塾長はまず書棚に横向きに積まれた大量の英語リーダー本を見せてくれた。授業前後の空き時間に子どもたちが読むのだそうだ。

それほど広くはないフロアに、スクリーン・スタディと呼ばれるインターネットを通じた英会話学習を行なう部屋や、数学、ピアノ、アートの部屋があった。

スクリーン・スタディ（スカイブ英会話）はフィリピンにいる先生と子どもたちがインターネットを介して英会話の勉強をするものである。子どもたちは予め教材の読解や単語の意味・文法事項の整理を行ない、準備が整ったところでコンピュータの前に向かいスカイブ授業を受け、それが終わったらまた机の前に座って復習する。

続いて塾長の授業を見せていただいた。対象は小学6年生4名で、全員が女子であった。授業で扱う英文の語彙レベルは日本の中学3年生程度で、授業そのものは韓国語で行なわれる。指名されると生徒たちは英文の分担部分を音読し、直後に韓国語訳する。そのあと先生が文法や慣用表現を整理する。

塾長は急に私を指して生徒たちに「何か質問はありま

せんか?」とおっしゃった。生徒たちはおずおずとしながらも色々英語で質問してきた。私はそれに答えつつ、「みんなはなぜ英語を勉強しているの?」と質問を返した。1人の生徒が「やらなければならないから」とすぐに答え、他の生徒たちもそれに同調するように頷いた。

全ての授業終了後、塾長に英語を勉強する目的は何だと思ふかと尋ねると、何よりも大学入試をクリアするためだという。韓国には大学受験以外の入学試験は実質的でない。だから毎年11月に行なわれる大学修学能力試験(日本の大学入試センター試験にあたる)で高得点を出し、少しでも評価の高い大学を受験できるように勉強するわけである。しかし、それだけではないと塾長先生は言う。「韓国に海外へ留学する学生が多いのは、いつでも国外で生活できるように、英語を使えるようにするためです。現代、サムソン、LGなどの会社がありますが、そうした大企業へ入れなければ、どこか外国に仕事がないか、とみんな思っているのです。韓国は狭いですからね。競争が激しいですから、外へ向うしかないのです」。

3. 大学生たち

学校やハグォンに通うだけが勉強ではない。その工夫の1つに学生たちが学外で自主的に行なうサークル活動がある。LanguageCastという韓国・ソウル発祥の多言語学習サークルがある。会場となるカフェの食べ物か飲み物を1つ注文することで誰でも参加できる。

私が参加したのは釜山大学校の近所にあるJ Squareというカフェの3階でミーティングが開催されたときであった。参加者は40人前後であった。大半は韓国人大学生であり、外国人は年齢も職業も様々であった。「多言語学習」とはいえ、参加者には英語が共通語として認識されているように思われた。実際、各種説明や最後のビンゴ大会などはすべて英語で行なわれた。

ここで話した韓国人男子学生になぜ英語を勉強しているのか尋ねると、「英語は世界の共通語だし、世界中の人と話す機会を与えてくれる。実際、私とあなたがこうやって話すことができるのも、英語のおかげだ」と言った。「英語はパワーだ。英語はすべてを与えてくれる」と。

少人数サークルもある。私が参加させてもらったのは日本語サークルである。これは1人の学生が大学ウェブサイト上で募集を行ない、応募してきた学生によって構成されたものである。週1回、大学図書館会議室やカフェに集まり、毎回テーマを1つ設定し、それに沿って日本語で話すのである。私が参加したときのテーマは「嘘でもいいから自慢してみよう」で、司会役の学生が参加者を指名しながら、テーマに沿って話を進めていく。

終了後、英語の勉強について訊いてみると、「誰も好き好んで勉強などしません。しかし就職の際、英語ができることは必須なのです。英語ができなければ書類選考の時点で落とされてしまいます」という。

ある男子学生が女子学生に「OPIc(英語スピーキングテストの1つ)の勉強をしないか」と提案すると、女子学生は「まずはTOEICを終わらせないと」と言った。「TOEICを終わらせる」とはスコア900以上を取ることである。興味深い表現だと思った。

彼女/彼らが日本語を学習し始めた理由は様々であったものの、「英語以外の外国語ができた方が就職の際に有利である」という意識は共通していた。韓国の学生たちの間では日常的に「スペック」という言葉が使われている。スペックには大学名、大学成績、TOEIC成績、海外への語学研修経験、資格証、ボランティア活動、インターンシップの経験、受賞経歴があり(金2014:4-5)、大学生たちは就職活動までにこれらをひと通り揃えるべく日々奮闘している。つまり、英語ができることは前提条件であり、それでは他人との差がつかないので、いかにスペックを多く獲得するかに学生たちは躍起になっているのである。

おわりに

釜山市と教育庁は英語教育に関して、私教育費の削減や教育機会の平等を推進することでグローバルに活躍する人材を育成し、果てはその力により釜山を世界的都市にすることを目標としているように思われた。しかし、公的教育制度上の思惑とは裏腹に、人々は個人の能力、あるいは大学入試や就職といった関門をくぐり抜けるための証明書を得るために教育を熱望しているようであった。人々にとって英語を習得することは「スペック」を増やすことであり、それどころか現在では職に就くための前提条件であり、場合によっては海外へ移住するための準備であった。

政府や行政が英語教育を平準化しようとする一方で、人々の英語習得に関する競争は少しも止む気配がない。教育機会の平等化や平準化の流れがなぜ人々の競争を沈静化する機能を果たさないのか。今後、韓国社会における教育の平準化と競争の激化についてもう少し掘り下げていければ、と考えている。

参考文献

- カン・ギョンオク. 2011.『英語教育機関の教育カリキュラム開発と評価』. 韓国文化社. (韓国語)
- 金明中. 2014.「若者たちの悲鳴－韓国における教育事情と若者雇用を取り巻く現状と対策－」;『ニッセイ基礎研レポート2014-06-13』. ニッセイ基礎研究所.